

# ドイツ文学わき道散歩(21)

1999年度ドイツ語学科卒業生 小林 ゆかり

ドイツの観光街道の一つ、ロマンティック街道は元々「ローマに続く」道の意である。しかし、ローテンブルクなどの中世都市を通っていることや観光誘致の意図のために、所謂「ロマンティックな」道と解されている。ロマンティックとは何か、と聞かれても漠然としたイメージしか湧かない方も多いのではなからうか。一般的に「ローマの」という語源から少し離れ、恋愛小説を表す「ロマンス」と深く結びついた印象が強い。

ドイツ・ロマン派に代表されるロマン主義文学は、内面的・幻想的で想像性に富み、夢と現実の入り混じった雰囲気を持つ作品が多いため、この印象もあながち間違っていないと思われる。その代表作として真っ先に題名が挙がるのは、ノヴァーリスの『青い花』であろう。原題は『ハインリヒ・フォン・オプターディングゲン』で、主人公の名前である。邦訳タイトルがしっくり来る作品。

この作品は未完である。さあ、それから...?という時に不意に終わってしまうのだ。しかし、そのことこそが、この作品を思い入れ深いものにする読者が多い要因でもある。終始幻想的で異様ともいえる雰囲気の小説は、夢と現実の狭間にゆらゆらと揺れるうす明かりのような光を放ち、その幻覚さながらの光がぼんやりと消えた後も、読者に仄かな光の残像を残しているからである。何か不思議な夢を見て、目覚めて内容は忘れていたものの、どこか不思議な感覚のみが頭に残る、そういった感じに少し似ている。邦訳タイトルの青い花は、主人公ハインリヒの夢に登場する花で、そこに少女の幻を見たハインリヒが憧憬を募らせる、という作品の象徴ともいべきもの。

作者であるノヴァーリスは詩人である。なるほど、詩人の描く詩的小説世界が幻想的な雰囲気作りに一役買い、読後も熱にうかされる。熱が冷めやらない読者は作者の他の作品も読んでみたいと感じ、作品への興味が作者への興味に転換する。作者の人生と作品とをシンクロさせて鑑賞する文学作品の愉しみ方は、賛否両論あることと思われるが、この作品の場合、作者の略歴や肖像を見ただけで、否が応にもイメージがだぶってしまうであろう。ノヴァーリスは本名をフリードリヒ・フォン・ハルデンベルクといい、貴族の生まれという肩書きと、女のように線の細い肖像画だけでも主人公に重なるが、彼の恋したゾフィーという女性が更にシンクロを進める。皆さんには、作者略歴を作品の後で読んでいただきたい。

外国文学の模倣に異を唱え、若い世代が熱情を注いだドイツの有名な文学運動に「シュトゥルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)」というものがある。若さ、激しさ、衝動、葛藤。あつという間に熱波に呑まれた作家たちが向かったのは、三本の大きな道だった。破滅への道、理性的な古典主義文学の道、そして疾風怒濤の気質を受け継いだドイツ・ロマン派の道。ギリシア・ローマの古典に範を取る古典主義と、「ローマの」という語源をもつドイツ・ロマン派が相容れない文学思潮であったことは面白い。道は分かれ、多くのわき道を作りながら、繋がっていくのかも知れない。「全ての道はローマに通ず」という諺が頭に浮かぶ。まわり道をしながら、いざ、ドイツ文学のわき道へ。